

会費千円（一般会員）機関誌は「茨城生物」。

事務局、水戸市天王町一九九、小菅方。

《自然友の会》四十五年十一月に発足。会長は石塚文

男氏。イデオロギーを越えて人間は自然を知ることが必要。そのため一般市民に自然観察の機会を設ける。

主な活動は月一回の定例会。事務局、水海道一高生物室内。会員制度はなく、ハガキ通信で会合を知らせる。

《茨城虫の会》昭和二十一年に発足して一度立ち切れ、最近再度活動を発足している。広瀬 誠氏、鈴木成美氏が主幹で、茨城の昆虫の現在の状況を正確に見るという学問的なグループで、自然保護はその結果として出て来ている。会員は約三十五人で半数が県外の人。機関誌「虫の国」の発行も会員個人の研究が主な仕事。会費なし。

《フロラ茨城》昭和三十三年九月、長谷川貞夫氏がNHK第二放送で「野の草」「山の草」について話したことを記念して結成。代表は長谷川氏。純粋な学問の組織で地元で立脚した植物調査を行なうことが目的。就しん会員百八十人。会員の中で個人的に自然保護活動をしている人もいる。

《その他》 武具池の自然を守る会、マクロフエトクラブ、昆虫同好会、茨城昆虫同好会、茨城山草の会、

菅生沼の自然を守る会、（土浦の自然を守る会についてはその紹介を省きます）
（新聞記者）

「スケッチで綴るふるさと土浦」の案内

佐 賀 進

私は、こゝ十数年来診療のあい間などに、明治・大正昭和の間に移り変わって来た土浦の街並や風俗をスケッチに画いて来ました。それが今では三百枚余りになりましたので、そのうち百五十枚を選び出して、「スケッチで綴るふるさと土浦」と題し出版することにしました。

大きさはA4版（29×20cm）装幀はクロス張り函入り二〇〇頁でカラー百枚、白黒五十枚を収めています。

なお、夫々の絵に描かれた街や川、橋、道路などについては、当時を知る人々が、その頃の風俗や想い出話などを混えながら詳しく解説しております。これらの語を読み、絵と見くらべることによって、今は失われた町の表情を活々と想い出すことが出来ると信じます。

出版予定日は五月頃ですが、紙不足やインフレの折柄多少おくれるかも知れません。